

死んでもいい

2009. 3. 24 (火)

ベック兄メッセージ (メモ)

引用聖句

エステル記 3章1節から6節

この出来事の後、アハシュエロス王は、アガグ人ハメダタの子ハマンを重んじ、彼を昇進させて、その席を、彼とともにいるすべての首長たちの上に置いた。それで、王の門のところにいる王の家来たちはみな、ハマンに対してひざをかがめてひれ伏した。王が彼についてこのように命じたからである。しかし、モルデカイはひざもかがめず、ひれ伏そうとしなかった。王の門のところにいる王の家来たちはモルデカイに、「あなたはなぜ、王の命令にそむくのか。」と言った。彼らは、毎日そう言ったが、モルデカイが耳を貸さなかったので、モルデカイのこの態度が続けられてよいものかどうかを見ようと、これをハマンに告げた。モルデカイは自分がユダヤ人であることを彼らに打ち明けていたからである。ハマンはモルデカイが自分に対してひざもかがめず、ひれ伏そうともしないのを見て、憤りに満たされた。ところが、ハマンはモルデカイひとりに手を下すことだけで満足しなかった。彼らがモルデカイの民族のことを、ハマンに知らせていたからである。それでハマンは、アハシュエロスの王国中のすべてのユダヤ人、すなわちモルデカイの民族を、根絶やしにしようとした。

エステル記 4章13節から16節

モルデカイはエステルに返事を送って言った。「あなたはすべてのユダヤ人から離れて王宮にいるから助かるだろうと考えてはならない。もし、あなたがこのような時に沈黙を守るなら、別の所から、助けと救いがユダヤ人のために起ころう。しかしあなたも、あなたの父の家も滅びよう。あなたがこの王国に来たのは、もしかすると、この時のためであるかもしれない。」エステルはモルデカイに返事を送って言った。

「行って、シュシャンにいるユダヤ人をみな集め、私のために断食をしてください。三日三晩、食べたり飲んだりしないように。私も、私の侍女たちも、同じように断食をしましょう。たとえ法令にそむいても私は王のところへまいります。私は、死ななければならないのでしたら、死にます。」

へブル人への手紙 11章32節から40節

これ以上、何を言いましょうか。もし、ギデオオン、バラク、サムソン、エフタ、またダビデ、サムエル、預言者たちについても話すならば、時間が足りないでしょう。彼らは、信仰によって、国々を征服し、正しいことを行ない、約束のものを得、ししの口をふさぎ、火の勢いを消し、剣の刃をのがれ、弱い者なのに強くされ、戦いの勇士

となり、他国の陣営を陥れました。女たちは、死んだ者をよみがえらせていただきました。またほかの人たちは、さらにすぐれたよみがえりを得るために、釈放されることを願わないで拷問を受けました。また、ほかの人たちは、あざけられ、むちで打たれ、さらに鎖につながれ、牢に入れられるめに会い、また、石で打たれ、試みを受け、のこぎりで引かれ、剣で切り殺され、羊ややぎの皮を着て歩き回り、乏しくなり、悩まされ、苦しめられ、——この世は彼らにふさわしい所ではありませんでした。——荒野と山とほら穴と地の穴とをさまよいました。この人々はみな、その信仰によってあかしされましたが、約束されたものは得ませんでした。神は私たちのために、さらにすぐれたものをあらかじめ用意しておられたので、彼らが私たちと別に全うされるということはありませんでした。

このエステル記4章16節後半に、すごいことばが書かれています。「私は、死ななければならぬのでしたら、死にます」と。当時の王の妃エステルの言ったことばです。どうしてこの態度をとることができたのでしょうか。答えは、初代教会のとった態度なのではないでしょうか。

コリント人への手紙・第二 4章18節

私たちは、見えるものではなく、見えないものにこそ目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものはいつまでも続くからです。

「見えるものではなく、見えないものにこそ私たちは目を留める」。初代教会の人々はこの態度をとりましたので、大いに祝福されました。「死ななければならぬのでしたら、死にます」。死ぬことについて話すのは変ではないかと若い人々はそう思うでしょう。しかし、四、五十年たてば、そのことが決して奇妙に思われず、むしろ当たり前のこととして理解されるはずです。

ソロモン王は、素晴らしいことを言ったのです。短い箇所です。

箴言 3章5節

心を尽くして主に拠り頼め。自分の悟りにたよるな。

「心を尽くして主に拠り頼め。自分の悟りにたよるな」。不幸になりたくなければ…。

「理性」は、もちろん、そのようなことを否定しています。しかし信仰は、この態度をとらざるを得ません。以前、茨城県的那珂湊にいた時代、ある日二人の学生が家に来たのです。救われたいからではありません。論文を書かなくてはならなかったからです。論文の題名は、『理性と信仰』でした。二人は、非常に困ってしまったのです。「信仰」についてどのように考えたらよいか分からなかったからです。そのために、信仰のことについて何かを知りたいと思うようになったのです。

私たちも、「理性と信仰」について考えるべきではないでしょうか。なぜなら、イエス様に出会った者のとるべき態度は、「理性的」なものではなく、「信仰的」なものであるからです。

「理性」とは何でしょうか。理性とは、「概念を作る能力」、「結論を引き出す能力」、「判断を下す能力」、そのようなものです。それはもちろん悪いものではありません。人間に与えられている能力ですから。それにもかかわらず、人間とは何と多くの見当違い、計算違い、意味のないことをしてしまうのではないのでしょうか。結局、自分の理性に頼ると、遅かれ早かれ、必ず壁にぶつかるようになります。ですから、ソロモン王の提案というより命令は、「心を尽くして主に抛り頼め」。「主にのみ抛り頼め。自分の悟りにたよるな」と。

なぜ、「自分の悟りにたよるな」と聖書は語っているのでしょうか。人間は悪魔によって騙されて以来、罪人として、主から離れて闇の中に置かれるようになってしまったのです。

この状態について、パウロは次のように書いたのです。

エペソ人への手紙 4章17節後半

もはや、異邦人がむなしい心で歩んでいるように歩んではなりません。

御霊に導かれていなければ、その可能性があります。

エペソ人への手紙 4章18節

彼らは、その知性において暗くなり、彼らのうちにある無知と、かたくなな心とのゆえに、神のいのちから遠く離れています。

神のいのち、即ち、イエス様のいのちを持っていない者はその知性において暗くなっていると、パウロはここに書いたのです。またローマ書1章28節にも、その状態について次のように書かれています。

ローマ人への手紙 1章28節

彼らが神を知ろうとしがらないので、神は彼らを良くない思いに引き渡され、そのため彼らは、してはならないことをするようになりました。

人間が主なる神を知ろうとしないゆえに、主は、人間をなすがままにさせておかれるのです。知ろうとしない、即ち求めたくないのは、意志の決断です。知ろうと思えば、必ず知るようになります。ですから、聖書の中に何度も、「求めよ。そうすれば与えられる」と約束されているのです。

またパウロは、殉教の死を遂げる前に書いたテモテ第二の手紙3章8節に、次のように書いたのです。

テモテへの手紙・第二 3章8節前半

こういう人々は、ちょうどヤンネとヤンブレがモーセに逆らったように、真理に逆らうのです。

テモテへの手紙・第二 3章7節

いつも学んではいるが、いつになっても真理を知ることのできない者たちです。

とあります。

真理に逆らう者は、主を体験的に知ることができません。これらの聖句を通して分かるように、自分の理性に頼ることは破滅と悲劇に終わるのです。あらゆる人間の知識は、限られており、不完全です。コリント第一の手紙13章9節にパウロは書いたのです。

コリント人への手紙・第一 13章9節

というのは、私たちの知っているところは一部分であり、預言することも一部分だからです。

私たち人間は大した者ではありません。多くの人は知識によって傲慢になり、自己目的に終わる危険性に直面しているのです。人間の知識が限られているということをよくわきまえている者は、「信仰」を必要とします。「信仰を持つ者」即ち、イエス様のみもとに来る者は経験します。

コロサイ人への手紙 2章3節

このキリストのうちに、知恵と知識との宝がすべて隠されているのです。

と。

ですから、人生においてイエス様を体験的に知ることが一番大切なことです。そして、そのような「正しい知識」と「認識」は、ただ「啓示」によってのみ、明らかにされます。イエス様を体験的に知るとは、「上からの啓示」を前提としているのです。

パウロは自分の経験について書いたのです。

ガラテヤ人への手紙 1章12節前半

私はそれを人間からは受けなかったし、また教えられもしませんでした。

私の「救いの土台」とは一つの教えではない、ということです。

12節後半

ただイエス・キリストの啓示によって受けたのです。

「神は、御子を私のうちに啓示してくださった」と、パウロは言うことができたのです。イエス様と出会う前に、彼は聖書を徹底的に読んだり勉強しました。けれど、たくわえた聖書の知識は、救われるために役立つばかりでなく、かえって邪魔だったのです。自分で分かると彼は思い込んでしまったのです。また教えられもしなかったし、ただイエス・キリストの啓示によって、上からの光に照らされることによってのみ、イエス様を知るようになったということを証したのです。ただ「啓示によってのみ」、自分の「本当の状態」、即ち「罪の状態」を知ることができ、それを通して、イエス様を体験的に知ること

ができるようになるのです。そして、イエス様を認識することこそ、実際の「信仰」です。この信仰によって、即ち「イエス様を体験的に知ること」によってのみ初めて、私たちは恵みにあずかることができ、平安と永遠のいのちを自分のものにすることができるのです。

ペテロの手紙・第二 1章2節

神と私たちの主イエスを知ることによって、恵みと平安が、あなたがたの上にあります。ますます豊かにされますように。

神と私たちのイエス様を知ることによって恵みと平安を持つようになった、と。

イエス様が祈りの中で言われた有名な言われたことばですが、

ヨハネの福音書 17章3節

「その永遠のいのちとは、彼らが唯一のまことの神であるあなたと、あなたの遣わされたイエス・キリストとを知ることです。」

イエス様は「いのち」そのものです。「いのち」を与えるお方というよりも、「いのちそのもの」です。道しるべではなく、「道」そのものです。イエス様を「体験的に知る」ことによって、滅ぶべき罪人としての状態から主の恵みをいただき、「本当の平安」を持ち、「永遠のいのち」にあずかることができる人々は、本当に幸いです。

今までのことをまとめてみると、

人間の「理性だけ」に集中することは、この世的なことであり、遅かれ早かれ必ず限界にぶつかってしまうということなのです。人間の理解力は、確かに論理的かもしれませんが、しかし、突き詰めていくと内面的な虚しさに帰結してしまうのです。

それに対して、「イエス様の与えられる信仰」は、あらゆる人間の認識や理性に勝っています。ですから、パウロはピリピ人への手紙の中で証しました。

ピリピ人への手紙 3章8節

私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損とと思っています。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらを持ちあくとと思っています。

つまり、全く役に立たないものというだけではなくて、邪魔でした。なぜパウロがこのような出来事に遭遇したかと言いますと、彼はイエス様の愛を体験的に知ることによって、その愛に満たされ、主の平安を味わい知ることができたからです。

エペソ人への手紙 3章19節前半

人知をはるかに越えたキリストの愛を知ることができますように。

と彼は書いたのです。

ピリピ人への手紙 4章7節前半

人のすべての考えにまさる神の平安

と書いてあります。なぜそのようなことを書いたかといいますと、自分で体験的に知るようになったからです。

信仰とは、「主なる神に対する絶対的な信頼」です。これに対して人間の理性は、自分の体や自分のいのちを心配しますが、その結果は不信仰に終わります。パウロは、彼が生きていた時代の伝道者たち、福音を宣べ伝えた兄弟たちについて何を書いたかといいますと、非常に悲しいことです。

ピリピ人への手紙 2章21節

だれもみな自分自身のことを求めるだけで、キリスト・イエスのことを求めてはいません。

これは、私たちにも当てはまる言葉ではないでしょうか。

人は四つの大きな願いを持っていると言われていています。これによって、人は自分のことを思っているかどうか分かります。

*第一に、人は身の安全を願います。

すべての人が、あらゆる面で安全でありたいと願っています。人々はお金を銀行に預金し、将来の子供の教育費に当てようとしますし、また、老後のことを考えて生命保険に入ったりします。これは、自らの安全を図る策にほかなりません。

イエス様は何と言われたかといいますと、「地に宝を蓄えるな。思い煩ってはならない。まず神の国と神の義を求めよ。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられる」と約束しておられます。また金銭だけではなくて、教育のことを考えても、人々はそこに安全を求めていることが分かります。

福音を宣べ伝える場合、まず神学校を出て初めて一人前になって、人の前で話すことができるのだ、と考える人々もいます。これも一つの身の安全を考えている心の態度にほかなりません。

パウロの証しは、考えられないほど大切です。

コリント人への手紙・第一 2章2節

私は、あなたがたの間で、イエス・キリスト、すなわち十字架につけられた方のはかは、何も知らないことに決心したからです。

もし、私たちが自分の身をイエス様にまかせ、イエス様にゆだねるなら、私たちは、不安定な者にならないはずです。パウロでさえも危険にさらされ、不安を身に感じ、死ぬのではないかと思った時があったことも、聖書は教えています。パウロはまた、「私は圧迫

されている。私には逃げ道がない。迫害され、地に倒された者のようになっている」と言っています。これは、「安全」とおおよそかけ離れた状態ではないでしょうか。

*二番目に、人々が願っていることは、安楽です。

人の心に深く願っていることは、安楽な生活を送りたい、この身をいたわって生きたいということです。これをイエス様は全く願われなかったのです。マタイ伝20章28節を見ると、イエス様は次のように告白してくださったのです。

マタイの福音書 20章28節

「人の子が来たのが、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためであるのと同じです。」

と言われました。イエス様は、この地上に一つの持ち物もお持ちにならず、また、この世にふるさとをもっておられなかったのです。イエス様は、辱められても黙り、誤解されても自らを弁護せず、黙々として歩まれたのです。

イエス様については、「わたしは虫であって、人ではない」と、詩篇22篇6節の作者の言葉がぴったり当てはまります。人間は自らを弁護することができますが、虫はそのようなことはできません。蛇と虫の違いは、大きさと力が違うだけでなく、蛇は身の危険を感じると鎌首を持ち上げて向かってきますが、虫は何もしないというところが違います。

私たちの自我は、あたかも蛇に似ているのではないのでしょうか。虫はどのようにされても、逆らうことをしません。ただなすがままにされています。

イエス様だけが、「わたしは虫である」と言うことがおできになったのです。イエス様は、辱められ、殺されました。イエス様は、私たちのために虫となってくださいました。このイエス様は、「父がわたしを遣わしてくださったように、わたしもあなたがたを遣わす」とおっしゃいました。

イエス様は、私たちの「自我」が打ち砕かれ、ヤコブが主なる神と相撲を取って「自我」が砕かれたように、私たちも己に死んで、主に仕える者になることを望んでおられます。私たちが容易で安楽な生活を願わず、ただイエス様のなされた生活を願い、それを行なうなら、本当に幸いです。

けれどその前に、まず私たちは自分自身の心の状態を考えることが必要です。私たちは例外なく自らをいたわり、また、打たれると逆らっていく蛇のような性質を持っています。

今まで話しましたように、人はみな身の安全を願います。また、人はみな「安楽」な生活を送りたいのです。更に人が願っていることは、

*第三番目になりますが、いわゆる楽しみです。

私たちは疲れると休むと言いますがこの休みが、みことばを学ぶことを怠り、祈ることをなおざりにし、集会に集うことをやめることを意味しているなら、それは霊的ないのちを殺してしまうことを意味しています。

「ご臨在の主」は、私たちの心の状態をよく知っておられます。私たちが、自分の時、自分の富、自分の計画、自分の楽しみを持っているかどうか、または、「イエス様。私も、私の持っているものもみな、あなたのものです。あなたのみこころを明らかにしてください」と願っているかどうか、すべてをご存じです。

イエス様は、「わたしは自分のいのちを与えるために来ました。仕えるために来ました」と言われ、「わたしは自分の願いを持ちません。自分の立場をとりません。どうか、わたしの思いではなく、父よ、あなたのみこころだけを成してください」という態度をとり続けられたのです。

*四番目に、人の心に深く根ざしている願いは、人に認められたいという願いです。

人々は何とかして自分に人気を集め、人々に自分の力を及ぼしたいという願いを心の中に潜ませています。大切にされ、誉れを得、自分のことを忘れてもらいたくないという願いを持っています。人に認められたいと願う人は、惨めです。救われた者たちの世界にも、この「人から誉れを得たい」という願いが伝染病のように入ってきて、このために多くの人々は御用になれない者になってしまっています。

イエス様は、「人からの人気を求めず、上のものを求めよ」と言っておられます。地を這う虫のように地のことばかりを考えず、ただ上のものを求める者になりたいものです。

今挙げたこれら四つの、安全を願う心、安楽を願う心、楽しみを求める心、それから人気が得たいと願う心はどこから来るかと言いますと、傲慢なパリサイ的な心から来ます。

パウロはガラテヤにいる兄弟姉妹に、次のように書いたのです。

ガラテヤ人への手紙 5章19節から21節

肉の行ないは明白であって、次のようなものです。不品行、汚れ、好色、偶像礼拝、魔術、敵意、争い、そねみ、憤り、党派心、分裂、分派、ねたみ、酩酊、遊興、そういった類のものです。前にもあらかじめ言ったように、私は今もあなたがたにあらかじめ言っておきます。こんなことをしている者たちが神の国を相続することはありません。

「あなたがた」とは、信じる者です。これらの肉の働きは、みな私たちの誇り高ぶる心から出て来ます。ですから、イエス様も同じことを言われました。

マルコの福音書 7章20節から23節

また言われた。「人から出るもの、これが、人を汚すのです。内側から、すなわち、人の心から出て来るものは、悪い考え、不品行、盗み、殺人、姦淫、食欲、よこしま、

欺き、好色、ねたみ、そしり、高ぶり、愚かさであり、これらの悪はみな、内側から出て、人を汚すのです。」

「人から出るもの、これが、人を汚すのです」と。「未信者から」と書いていないのです。「人」、「あらゆる人間」から出てくるものです。ほとんどの人間は、「悪いのは環境なのだ。もちろん相手なのだ」と。けれどイエス様は違います。「自分の心から出て来るのです」と。

なぜ、まだ滅びに向かっていく何百万という人々が、一度もイエス様のことを聞かないまま歩み続けているのでしょうか。これは、みな私たち信じる者の罪のゆえです。私たちが自分のことを願っているからです。

なぜ、イエス様のからだである私たち兄弟姉妹は、こんなに弱く、力なく、悪の霊と闘うことに弱いのでしょうか。それは、私たちが自分のことを考えているからです。

なぜ、多くの兄弟姉妹は生ぬるく、不熱心で、自己満足しているのでしょうか。それは、自分のことばかり求めているからです。

まとめてみますと、

「信仰」とは、「主に対する絶対的な信頼」です。そして理性とは、自分の体やいのちを心配しますが、その結果は不信仰に終わるのです。そして信仰から出ないことは、すべて罪です。

更に、「信仰」とは、「全知全能」なる、「主なる神のすべてを確信する」ことです。これに対して、人間の理性は、主の全知全能なることを疑います。これもまた、不信仰の表われです。

また、信仰は、目に見えないお方を見ます。これに対して人間の理性は、心配そうに目に見えるものを見るのです。これもまた不信仰の表われにほかなりません。

それゆえ、「イエス様を信じる」ということは、「徹頭徹尾自らを主にゆだねる」ことです。イエス様は私たちを完全に支配する権利を持っておられるゆえに、そのことを私たちに要求しておられます。

信仰とは、「主のみことばである聖書に対して全く従順」であることをも意味しています。信仰とは、あらゆる罪に背を向けて離れることです。

ですから、このようにイエス様を信じている兄弟姉妹は、この世では異分子であるとも言えるわけです。イエス様を信じる者は、理解されず、人々から笑われる存在です。そのため人々は、信じる者の多くを馬鹿にしたり、憐れんだりするのです。人々は信者を憎み、迫害します。しかし、イエス様の御名のゆえにすべてを投げ捨てても悔いるところはないという事実こそ、私たちの喜びの源です。

これに関連して聖書に出てくる事例七つを、簡単に歴史的に順を追って読んでみたいと思います。

*第一に、今から約三千五百年前に生きた「モーセ」のことについてです。

ご存じのようにモーセは王子であったので、すべてが自分の思い通りにできたわけです。望むものはすべて自分のものとなりました。しかし彼は、そのように本当に恵まれた自分の境遇を投げ捨てたのです。モーセは本当に世界一の愚か者だったのではないのでしょうか。なぜそのような愚かなことをしてしまったのでしょうか。答えはヘブル人への手紙に書かれています。おもしろい表現が出てきます。彼は人がめったにしないことをしてしまったのです。苦しむことを選んだのです。

ヘブル人への手紙 11章24節から27節

信仰によって、モーセは成人したとき、パロの娘の子と呼ばれることを拒み、はかない罪の楽しみを受けるよりは、むしろ神の民とともに苦しむことを選び取りました。彼は、キリストのゆえに受けるそしりを、エジプトの宝にまさる大きな富と思いました。彼は報いとして与えられるものから目を離さなかったのです。信仰によって、彼は、王の怒りを恐れなくて、エジプトを立ち去りました。目に見えない方を見るようにして、忍び通したからです。

モーセは、エジプトの富をことごとく持っており、エジプト人のあらゆる学問を教え込まれましたが、これらはすべてはかない罪の楽しみであると言ったのです。モーセは、この世の富や教養と、とこしえの報いとを比較して、その結果、このような決断を行なったのです。

モーセは、この世のいろいろな楽しみの結果が「死」であること、そしてその死後には、さばきが下って永遠の滅びに行くべきことをよく知っていました。そのような意味で、モーセはこの世とは違った、別の世界に住んでいたと言うことができるでしょう。モーセは、すべての富を自分の手中に置き、指導者としての才能も備えておりましたが、そのような賜物を全部捨ててしまいました。「永遠の冠のゆえに、この貧しき生涯を捧げます」、「私は死ななければならないのでしたら、死にます」。私たちも、常にこの心構えを持つことができたら、幸せです。

*二番目の例は、今から約三千三百年前の人である「ルツ」という女性です。

彼女は、父、母、ふるさとを捨てました。ルツ記2章に、次のように書かれています。

ルツ記 2章11節後半

「父母や生まれた国を離れて、これまで知らなかった民のところに来た」

とあります。ルツは自分の身の安全や暖かさなどを捨てて、これまで知らなかった地へとやって来たのです。「そのようなことをせずに、ここにとどまりなさい」と彼女に注意した人々は大勢いたことでしょう。けれど、ルツは姑であるナオミを通して、全知全能なるお

方を知り、そのゆえにこれらのものを喜んで捨てることができたのです。

このような歩みを踏み出し始めたルツは、その翼の下に避けどころを求めた主から豊かな報いを受けたのです。ルツは、人間的な安全を捨て、主のみ翼の下に本当の平安を見出したのです。「私は死ななければならないのでしたら、死にます」という決心をしたルツは、決して失望することはありませんでした。私たちもこの態度をとることができれば、決して失望することはありません。

*第三に、今から約二千六百年前に生きた「ダニエルの三人の友人たち」です。

ダニエルの三人の友人たちの特徴は、妥協なき態度でした。それゆえに、三人とも火の中に投げ込まれました。彼らは、単なる理想主義者、或いは空想家だったのでしょうか。彼らは思慮を失ったか、或いはどうかしてしまったのでしょうか。

ダニエル書 3章15節後半から18節

「しかし、もし拝まないなら、あなたがたはただちに火の燃える炉の中に投げ込まれる。どの神が、私の手からあなたがたを救い出せよう。」シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴはネブカデネザル王に言った。「私たちはこのことについて、あなたにお答える必要はありません。もし、そうなれば、私たちの仕える神は、火の燃える炉から私たちを救い出すことができます。王よ。神は私たちをあなたの手から救い出します。しかし、もしそうでなくても、王よ、ご承知ください。私たちはあなたの神々に仕えず、あなたが立てた金の像を拝むこともしません。」

神風特攻隊は、ある意味で理想主義者たちだったでしょう。けれど、今やその精神は、いったいどこへ行ってしまったのでしょうか。ドイツでも同じように、何万人もの人々がヒトラーのために死ぬことは特権であると思ったのです。しかし現在のドイツでは、そのような精神は見受けられません。

しかし、二千六百年前のこれら三人と同じように、どんなことがあっても決して妥協しないというキリスト者たちが、こんにちでも大勢います。彼らは決して命を粗末にしてもかまわないとは思っておらず、主なる神の全知全能に抛り頼み、目に見えないお方を心の目で見ているのです。

三人は次のように思ったのです。「私たちは死ななければならないのでしたら、死にます。しかし、どんなことがあっても、決して妥協することはありません」。私たちのとるべき態度も、常にこのようでありますように。

*第四番目に、「ダニエル」を考えてみましょう。彼は、祈ることを禁じられていたにもかかわらず、三十日間(ダニエル書 6:7~10)、一日でも祈ることをやめなかったため、いのちを奪われる危険に瀕していました。

ダニエル書 6章10節後半

彼は、いつものように、日に三度、ひざまずき、彼の神の前に祈り、感謝していた。

ダニエルは、窓を閉めて誰にも気づかれないように祈るという賢い方法をとることもできただけです。けれどダニエルは、窓を開けて祈るという、普通の人には理解できない、一見愚かと思われる方法をとったのです。ダニエルはその当時、知恵者でありましたが、このような愚かと思われる態度をとりました。ダニエルは、非常に危険を伴うこのような方法を、意識して行なったのです。しかし、彼は、自分自身のためを考えてそうしたのではなく、「主の名誉」のためにしたのです。「私は死ななければならないのでしたら、死にます」と。

私たちは、自分たちの生活を振り返ってみると、あまりにもダニエルの祈りの生活とはかけ離れていることを示され、恥じ入らざるを得ません。

*第五番目の例は、今から約二千五百年前の人、「エステル」です。

エステルという女性も、自分のことを知りながら敢えてそれを行なったのです。このエステルがとった態度は、獅子の穴に手を入れるよりも危険なことでした。しかし、彼女は、無思慮にこのようなことをしたのではなく、三日間断食しました。三日間祈った後にこの確信を得たのです。「私は死ななければならないのでしたら、死にます」と。

彼女がこの態度をとったので、ユダヤ人たちはみな救われただけではなく、ユダヤ人を殺そうと思った人々が、反対に殺されてしまったのです。

*第六に、「バプテスマのヨハネ」のことを、考えてみたいと思います。

このヨハネは、約千九百年前の人でしたが、「あの方、即ちイエス様は盛んになり、私は衰えなければならない」と告白した預言者でした。「私自身は決して大切な者ではない。ただ、イエス様のご栄光だけが崇められますように。そのために、私は死ななければならないのでしたら、死にます」と。

バプテスマのヨハネは、殺される直前、イエス様が本当に来たるべき救い主であるかを確かめようとして、人を遣わしたのです。それに対して、イエス様は、はっきりとお答えになりました。

マタイの福音書 11章5節

「盲人が見、足なえが歩き、らい病人がきよめられ、つんぼの人が聞こえ、死人が生き返り、貧しい者には福音が宣べ伝えられているのです。」

このことによってヨハネは、イエス様が本当に来たるべきメシヤであられることを知り、自分が殺されることに何の躊躇することもせず、定められた自分の使命に対する不従順な気持ちを持つこともなく、まさにこれこそ然るべき結果であることと確信しつつ、すべてを主の御手にゆだねたのです。「私は死ななければならないのでしたら、死にます」と。

私たちが問題なのではなく、「イエス様のご栄光」だけが大切です。私たちも毎日、この態度をとることができるよう。

みなさんは恐らく覚えているでしょう。何十年前だったか忘れましたが、三島由紀夫が割腹自殺をした時、彼の首は床に転がり落ちました。バプテスマのヨハネも殺された時、その首が転がり落ちました。けれど、両者の違いはいったい何だったのでしょうか。三島由紀夫の場合には、常に自分が中心となっていたため、生きる望みを全く失ってしまったのです。これに対してバプテスマのヨハネの場合には、人間が中心となることを好まず、ただ「イエス様のご栄光」が崇められることだけを中心とするものだったのです。

*最後に七番目の例、「パウロとパウロの同労者たち」について考えて終わります。

パウロの生涯は非常に輝かしいものでした。パウロは当時最高の名誉であったローマの市民権を持っており、天才的な才能を持っており、最高の学問と教養を身につけており、将来を非常に有望された男でした。パウロ自身の判断と確信によれば、主なる神は、即ちイエス様は、最大の偽善者、偽り者だったのです。そのためパウロは、イエス様を信じる者たちを迫害し続けました。

しかしある日、パウロはイエス様に出会いました。このイエス様との出会いによって、彼は、自分が今まで悪魔によって盲目にされていたことを知りました。そして、かつては迫害者であったパウロが、燃えるような福音の戦士となったのです。

ピリピ人への手紙 3章7節、8節

私にとって得であったこのようなものをみな、私はキリストのゆえに、損と思うようになりました。それどころか、私の主であるキリスト・イエスを知っていることのすばらしさのゆえに、いっさいのことを損と思っています。私はキリストのためにすべてのものを捨てて、それらをちりあくたと思っています。

「私は死ななければならないのでしたら、死にます」。これこそがパウロの心構えでした。

パウロは、ミレトでエペソから来た長老たちの前で証しました。

使徒の働き 20章24節

「私が自分の走るべき行程を走り尽くし、主イエスから受けた、神の恵みの福音をあかしする任務を果たし終えることができるなら、私のいのちは少しも惜しいとは思いません。」

カイザリヤでは、パウロは次のように語ったのです。

使徒の働き 21章13節後半

「私は、主イエスの御名のためなら、エルサレムで縛られることばかりでなく、死ぬことさえも覚悟しています。」

できるだけつまずきを与えずに、多くの人々をイエス様のみもとに導くことが彼の使命でした。例えば、コリント第一の手紙8章13節を見ると、彼は次のように書いたのです。

コリント人への手紙・第一 8章13節

もし食物が私の兄弟をつまずかせるなら、私は今後いっさい肉を食べません。それは、私の兄弟につまずきを与えないためです。

コリント人への手紙・第一 10章33節

私も、人々が救われるために、自分の利益を求めず、多くの人の利益を求め、どんなことでも、みなの人を喜ばせているのですから。

コリント人への手紙・第二 12章15節前半

ですから、私はあなたがたのたましいのためには、大いに喜んで財を費やし、また私自身をさえ使い尽くしましょう。

また、最後に書いたテモテ第二の手紙で、彼はまた次のように証しました。

テモテへの手紙・第二 2章9節、10節

私は、福音のために、苦しみを受け、犯罪者のようにつながれています。しかし、神のことばは、つながれていません。ですから、私は選ばれた人たちのために、すべてのことを耐え忍びます。それは、彼らもまたキリスト・イエスにある救いと、それとともに、とこしえの栄光を受けるようになるためです。

これらの言葉がすべて一つのこと、即ち「私は死ななければならないのでしたら、死にます」ということを語っているのです。私は、「主イエス様の御名が崇められるなら」、自分自身を大切にすることは致しません。

しかもこれは、パウロだけではなく、彼の同労者たちの態度でもありました。例えば、エパフロデトという同労者もそうであったとパウロは言ったのです。

ピリピ人への手紙 2章30節

彼は、キリストの仕事のために、いのちの危険を冒して死ぬばかりになったからです。彼は私に対して、あなたがたが私に仕えることのできなかつた分を果たそうとしたのです。

エパフロデトの信念も、「私は死ななければならないのでしたら、死にます」ということでした。

私たちも、イエス様の御名が崇められますようにという強い願いを持つことができますように。イエス様は、私たちすべての者がこのような態度をとることを望んでおられます。私たちの場合はいったいどうでしょうか。

イエス様を知らないために望みのない人々と私たちとは、本当に区別があるのでしょうか。私たちは、自分が中心になりたい、人に認められたい、見えるものばかりを見てあれ

やこれやと思ひ煩っているのでしょうか。それとも、イエス様に信頼し、イエス様の全知全能を心から確信し、絶えず目には見えないお方を見上げているのでしょうか。

次のようなみことばは、私たちにも当てはまるのです。

ヨハネの手紙・第一 3章16節

キリストは、私たちのために、ご自分のいのちをお捨てになりました。それによって私たちに愛がわかったのです。ですから私たちは、兄弟のために、いのちを捨てるべきです。

批判と全く反対のことです。兄弟姉妹のために、いのちを捨てるべきです。

ローマ人への手紙 15章1節後半

自分を喜ばせるべきではありません。

マタイの福音書 16章24節

「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。」

ルカの福音書 14章26節、27節

「わたしのもとに来て、自分の父、母、妻、子、兄弟、姉妹、そのうえ自分のいのちまでも憎まない者は、わたしの弟子になることができません。自分の十字架を負ってわたしについて来ない者は、わたしの弟子になることはできません。」

ルカの福音書 14章33節

そういうわけで、あなたがたはだれでも、自分の財産全部を捨てないでは、わたしの弟子になることはできません。

聖書は、常に二者択一を要求しており、その中間はあり得ないのです。ですからペテロ第一の手紙4章2節に、次のように書かれています。

ペテロの手紙・第一 4章2節

こうしてあなたがたは、地上の残された時を、もはや人間の欲望のためではなく、神のみこころのために過ごすようになるのです。

即ち、人間の欲望のために生きるか、主のみこころのために生きるか、二者択一を迫られているのです。換言すれば、肉に従って歩むか、御霊によって歩むかのどちらかです。

ローマ人への手紙 8章13節

もし肉に従って生きるなら、あなたがたは死ぬのです。しかし、もし御霊によって、からだの行ないを殺すなら、あなたがたは生きるのです。

とあります。また、

マタイの福音書 16章25節

「いのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしのためにいのちを失う者は、それを見いだすのです。」

私たちは、自分のいのちを救おうとしているのか、或いはそれを失おうとしているかのいずれかに属するのです。

モーセは自分のいのちを失う備えをもっていたので、イスラエルの民は救われたのです。

ルツは、自分のいのちを失う備えをもっていたゆえに、豊かに報われたのです。彼女は異邦人であるにもかかわらず、ダビデやイエス様の先祖とされているのです。ルツはルカ伝18章29節を体験的に知るようになったことでしょう。

ルカの福音書 18章29節、30節

「神の国のために、家、妻、兄弟、両親、子どもを捨てた者で、だれひとりとして、この世にあつてその幾倍かを受けない者はなく、後の世で永遠のいのちを受けない者はありません。」

ダニエルの三人の友人たちは、自分のいのちを失う備えをもっていました。その結果、異邦の王であるネブカデネザルが、次のように言わざるを得なかったのです。

ダニエル書 3章28節、29節

「ほむべきかな、シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴの神。神は御使いを送って、王の命令にそむき、自分たちのからだを差し出しても、神に信頼し、自分たちの神のほかはどんな神にも仕えず、また拝まないこのしもべたちを救われた。それゆえ、私は命令する。諸民、諸国、諸国語の者のうち、シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴの神を侮る者はだれでも、その手足は切り離され、その家をごみの山とさせる。このように救い出すことのできる神は、ほかにないからだ。」

ダニエルは、自分のいのちを失う備えを持っていましたが、異邦の王であるダリヨスは、庶民に次のように書き送りました。

ダニエル書 6章25節後半から27節

「あなたがたに平安が豊かにあるように。私は命令する。私の支配する国においてはどこでも、ダニエルの神の前に震え、おののけ。この方こそ生ける神。永遠に堅く立つ方。その国は滅びることなく、その主権はいつまでも続く。この方は人を救って解放し、天においても、地においてもしるしと奇蹟を行ない、獅子の力からダニエルを救い出された。」

エステルも、自分のいのちを失う備えを持っていましたので、その民は滅ぼされることなく贖い出されました。

バプテスマのヨハネも、自分のいのちを失う備えをもっていただけでなく、事実そのために自分のいのちを失いました。その時、彼は自分の思いではなく、主のみこころが行なわれるようにと平安のうちに召されたのです。

パウロも、自分のいのちを失う備えを持っていたゆえに、何千人の信者たちとともにネロによって殺されたのです。殺される少し前に、彼は次のように書き送りました。

テモテへの手紙・第一 1章12節

私は、私を強くしてくださる私たちの主キリスト・イエスに感謝をささげています。なぜなら、キリストは、私をこの務めに任命して、私を忠実な者と認めてくださったからです。

テモテへの手紙・第二 1章12節

そのために、私はこのような苦しみにも会っています。しかし、私はそれを恥とは思っていません。というのは、私は、自分の信じて来た方をよく知っており、また、その方は私のお任せしたものを、かの日のために守ってくださることができると確信しているからです。

テモテへの手紙・第二 4章6節から8節

私は今や注ぎの供え物となります。私が世を去る時はすでに来しました。私は勇敢に戦い、走るべき道のを走り終え、信仰を守り通しました。今からは、義の栄冠が私のために用意されているだけです。かの日には、正しい審判者である主が、それを私に授けてくださるのです。私だけでなく、主の現われを慕っている者には、だれにでも授けてくださるのです。

今まで述べてきた七人の「信仰者」は、すべて「自分のいのちを失う備え」を持っておりました。けれど、決して自分のいのちを粗末にしていたのではないのです。彼らは、決して近視眼的ではなく、また自分中心でもなく、ただ「イエス様のご栄光のため」に、「失われた者が救われるため」、「信じる者が新しく造り変えられて霊的に成長するため」に、生きたのです。

したがって、自分の考え、自分の感情、自分の意思が自分の基準となるのではなく、「私は死ななければならないのでしたら、死にます。ただイエス様のご栄光だけが崇められますように」という態度を常に持ち続けたのです。

私たちも、このような態度をとることが許されています。自分の意思、権利、いのちを主のためにささげることが許されていることは、何という特権でありましょう。

了